

令和元年6月21日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02436

研究課題名(和文) 神廟祭祀と唐代文学

研究課題名(英文) Shrine Sacrifice and Tang Literature

研究代表者

高橋 文治 (Takahashi, Bunji)

大阪大学・文学研究科・招へい教員

研究者番号：00154857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、唐代文学の中を流れる天地宇宙観とその変遷を、神廟祭祀における主体、対象(神格)、祭り方の描写を通して分析することを企画したものである。本研究課題の成果は以下の三つの視点から作成された。第一の視点は儒教が伝統的に祭祀の対象とはみなさなかつた女性神を唐代はどのように祭ったかという問題であり、これは研究代表者高橋文治が担当した。第二の視点は、これも儒家が祭祀の主体として想定しなかつた女帝がいかに祭祀を企画したかという問題であり、これは研究分担者加藤聡が担当した。また第三の視点は、民間の淫祀をめぐって地方官がいかなる議論を展開したかという問題であり、これは研究分担者谷口高志が担当した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、唐代の帝王や朝臣たちが祭祀についていかなる議論を展開し、文人たちがその議論や観点をどのように文学に定着させたかを観察することによって、唐代における国家観や天地宇宙観を抽出することを企画したものである。中国における国家祭祀や民間祭祀の変遷は、思想史や政治史の立場からこれを取り上げることはあっても、文学史研究の立場からこれを取り上げることはなかつた。しかし、唐代の文人たちは国家祭祀や民間祭祀に意外に重大な関心を寄せていたのであり、個々の祭祀の実情を最も生き活きと後世に伝えているのも文学作品だったのであり、この点に着目したのが本研究課題最大の学術的、社会的意義といえるだろう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to look at the way views on the cosmos in Tang literature have changed through the course of the Tang Dynasty, viewed through the lens of how the objects(deities) of shrine sacrifices and these sacrificial rites themselves are depicted in these works. This project is made up from three different perspectives. The first perspective is offered by project leader Bunji Takahashi, who examines the ways in which female deities in the Tang Dynasty were portrayed, despite goddesses traditionally not being the object of worship in Confucian society. Contributor Satoshi Kato provides a second perspective, focusing on the ritual sacrifice toward empresses, a phenomenon similarly hard to imagine in traditional Confucian contexts. The final perspective is offered by Takashi Taniguchi, who tackles the question of how local officials dealt with folk shrines devoted to unorthodox gods.

研究分野：中国文学

キーワード：皇天后土 封禅 淫祀 郊廟祭祀 五嶽 女神 武則天

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者・高橋文治は、平成二十三年科学研究費補助金(研究成果公開促進費)課題番号: 235117 の助成を受け、『モンゴル時代道教文書の研究』を刊行した。この研究は、中国元朝期における国家祭祀のあり様をモンゴル政権や道教教団との関連から考察したものだ。また同人は、平成24年~27年度科学研究助成基金助成金・基盤研究(C)(課題番号24520396)の交付を受け、「宋金元期の墳墓と戯曲文学」の研究を行ったが、この研究も宋金元期の宗廟祭祀と文学の関連を考察したものだ。こうした研究を通じて研究代表者・高橋文治は、中国における天地宇宙観、祭祀観念の原型がどのようなものだったか、唐宋革命以前の唐代に遡って究明する必要性を痛感するに至った。

中国古代の祭祀観念については、小南一郎が『古代中国 天命と青銅器』(京都大学出版会)という優れた研究成果を平成18年に発表した。また、隋唐期の国家祭祀については雷聞が『郊廟之外 隋唐国家 祭祀与宗教』(三聯書店 2009年)を発表し、その問題点を整理した。こうした研究を通じて研究代表者は、天地宇宙観や祭祀観念が唐代に大きく変化したことを認識すると同時に、雷聞の研究がそうだったように、従来の研究は文学資料をあまり用いず、主に思想史や政治史の立場から行われていることを痛感した。ここに、唐代の祭祀観念をめぐる諸問題を、主に文学資料を用いて再考する本研究課題の発想が生まれたのである。

2. 研究の目的

本研究課題は、唐代に実施された神廟祭祀を国家祭祀と民間祭祀に分類し、その祠廟が位置する山川や祭神が元来どのような神話・伝説をもち、唐代にどのような説話を形成したか、また、その祭祀はどのように実施され、当地をとりまく山川や祭神神話を当時の文人たちはどのように詩歌に詠じているかを網羅的に集約させることによって、唐代の祭神神話が歴史的にはどのように変遷し、その変遷が唐代文学の潮流とどのように関連しているかを明らかにしようとするものである。こうした作業を通じて、本研究課題は、共同体の紐帯たる祭祀観念、ならびにそこから派生するさまざまな価値観や制度が唐代においてどのように変化し、その変化が文学作品にどのように反映されているかを検証するものである。

本研究課題は、唐代に起きた中国社会の構造的な変革や再編を、文学作品が描く神格観念・廟神神話の解体と再編を通じて観察しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究課題は、研究代表者・高橋文治と、研究分担者・加藤聰、研究分担者・谷口高志の三人による共同研究の形で遂行された。本研究課題は、唐代の神廟祭祀に関わる問題をなるべく多角的に捉えるために、研究課題にさらに三つの主題を設定し、それぞれに専従の研究者を貼り付けるかたちで実施された。第一の主題は、儒家が祭祀の対象として認定しなかった女神が唐代にはどのように扱われたかという問題であり、これは研究代表者・高橋文治が担当した。第二の主題は、これも儒家が祭祀の主体として想定しなかった女帝の出現の問題であり、これは研究分担者・加藤聰が担当した。また、第三の主題は民間の淫祀に注がれた官僚たちの眼差しの問題であり、これは研究分担者・谷口高志が担当した。

また、研究代表者・高橋文治は主に唐代の散文資料の分析に、研究分担者・加藤聰は主に初唐期に書かれた郊廟歌辞の分析に、研究分担者・谷口高志は主に中晩唐期の歌謡資料の分析に、それぞれ従事した。

さらにまた、いずれの視点からの分析においても、神廟が位置する現地の調査を行うものとした。

4. 研究成果

本研究課題は、唐代文学の中に流れる天地宇宙観とその変遷を、神廟祭祀における主体、対象(神格)祭り方の描写を通じて分析することを企画したものであった。

儒家の経典が記述する帝王とは、天帝の付託を受けて天意を代行し、天地宇宙の中心軸にあって万民のために天地山川と五穀の神を祭るものであった。犠牲を捧げて天帝を祀ることが出来るのは原則として帝王だけであり、その資格をもたないものが、祭るべきでない神格を、適切ではない方法によって祀った場合、天地宇宙は正常な運行をさまたげられ、災厄がもたらされると考えられた。儒家の経典はそうした祭祀を「淫祀」と呼んでこれを排除したのである。

二世紀から七世紀に及ぶ長い分裂期を経て唐王朝が成立したとき、その帝王や朝臣たちは、自身たちが統一を実現した正統王朝の一員であることを世界に向けて宣言することを考えた。分裂期には長く放置された国家祭祀がそこでにわかに注目されることになったが、儒家の経典が書かれてから長い年月がたち、その間に道教や仏教、その他さまざまな思想・宗教が発生していたため、天地宇宙についての観念や国家観、帝王観に大きな揺らぎが生じていたばかりか、経典の記述があまりに簡素であったため、「誰が」「何のために」「どのように」祭るかについて統一的な観点を提示することがきわめて難しい状況に立ち至っていた。たとえば、中国の古典的な宇宙観は、漢代以後、陰陽五行の生成論によって支えられ、陰陽五行の円満な循環と交替は男女の対偶神の交流によって象徴されたが、先秦時代に成立した儒家の経典はそもそも女神の祭祀それ自体を想定していなかった。また、天地山川の神々のうち特に地祇や水神については漢代以前からこれを女神として祀る習慣が一部にはあったが、儒家の経典が地祇や水神にの

祭祀について特別な規定を設けることはもちろんなかった。しかるに、唐代に至って、地祇や水神を女神として祀る風はさらにその傾斜を深めたばかりか、祭祀を主宰する帝王の側にも則天武后のような女帝が出現し、祭祀における陰原理の扱いは国家的問題に発展せざるを得なかった。唐代においてはこのように、帝王が主宰する国家祭祀の場においてさえ、「誰が」「何のために」「何を」「どのように」祭るかは、天地宇宙や人倫の根本に立ち返って議論されなければならなかったのである。

また、唐代も中唐期になると中国各地にさまざまな民間祭祀が発生し、その扱いについても、中央や地方の官僚たちの間でさまざまな議論が展開された。地域の山川の祭祀については、儒家の經典においては、朝廷が認定したそれを各地の諸侯がその責任において実施するよう規定されていた。したがって唐代においても、中央から派遣される官僚が一定の基準をもって地域の神々を選別し、自身の裁量によって祭祀を実施したが、しかるに、神々の正統性の判断は、その地域と朝廷との政治的関係性、ならびに、地域住民と神々との倫理的関係性に負うところが大きかった。朝廷に帰順しない地域にあっても、民の教化に利する良好な祭祀はあり得たのである。地域の民間祭祀が「淫祀」であるか否かの判断は現地の地方官に委ねられたが、一概に「淫祀」とは為し得ない複雑な現実がそれぞれの地域にはあった。中央から派遣された官僚たちは、その官僚が誠実であればあるほど、地域の現実と自身の理想とのはざままで苦悩せざるを得なかった。民を治める理想的な政治家像は地域の実情に応じて異なる、という単純な事実を、官僚たちは「淫祠」と直面することによって知ることになったのである。

本研究は、総体としてみれば、唐代と云う比較的開放的な社会の中でいかなる世界観が胎動していたかを観察したものといえる。中国における国家祭祀や民間祭祀の変遷は、宗教史や思想史、政治史の立場からこれを取り上げることはあっても、文学史の立場からこれを議論することは従来ほとんどなかった。しかるに、唐代の文人たちは国家祭祀や民間祭祀に実は重大な関心を寄せていたのであり、また、そうした祭祀の実情をもっとも生き活きと後世に伝えたのも彼らの文学作品であった。本研究課題の独創性は、文学資料を用いて唐代の天地宇宙観や祭祀の実情を読み解くという着眼点のユニークさにあった。そうした観点から唐代文学のいくつかの作品に新たな読み方を示したことは、本研究課題の成果の一つである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

- 加藤聰 「賈島詩訳註(5)」(査読無し)
(「中唐文学会報」25 2018年)(pp.11-71)
- 谷口高志 「偏愛する文人たち 中晩唐期における嗜好への傾倒と個の標榜」(査読有)
(「九州中国学会報」56 2018年)(pp.16-30)
- 谷口高志 「李賀の詩歌における祭祀と神格 神の失墜と龍の浸食」(査読無し)
(「佐賀大学国語教育」2 2018年)(pp.32-45)
- 加藤聰 「上海図書館蔵清初鈔本『賈浪仙長江集』十巻について」(査読無し)
(「京都女子大学人文論叢」66 2018年)(pp.1-19)
- 谷口高志 「元稹の詩歌における淫祀—民間祭祀への眼差し—」(査読無し)
(「佐賀大学国語教育」1 2017年)(pp.11-25)
- 加藤聰 「則天武后『大享昊天樂章』訳稿(下)」(査読無し)
(「京都女子大学人文論叢」65 2017年)(pp.91-108)
- 高橋文治 「束の間の幻影 舒元輿の文学」(査読無し)
(「待兼山論叢」50 2016年)(pp.1-23)
- 加藤聰 「則天武后『大享昊天樂章』訳注稿(上)」(査読無し)
(「中唐文学会報」23 2016年)(pp.36-52)
- 加藤聰 「十三年禪社首山祭地祇樂章」訳注稿」(査読有)
(「中唐文学会報」22 2015年)(pp.155-180)

〔学会発表〕(計8件)

- 加藤聰 「日本学者对中国古典詩声音楽的領悟 以松浦友久的解読為例」(国際学会)
(「東山之会・国立政治大学華人主体性研究中心共催中国文学座談会」2018年)
- 加藤聰 「女帝・則天武后と高山 その祭祀と文学のかたち」
(「京都女子大学人文学会公開講座」京都女子大学 2017年)
- 加藤聰 「武則天郊廟歌辭小考」(国際学会)
(「文学与文化国際學術研討会」京都女子大学 2017年)
- 谷口高志 「中晩唐期の文人における嗜好への意識」
(「九州中国学会」九州大学 2017年)
- 谷口高志 「愛好と蒐集 唐代文人の生活様式に関する一考察」
(「佐賀大学国語教育学会」佐賀大学 2017年)
- 加藤聰 「則天武后の昊天祭祀香歌辭」

(「東山之会」京都女子大学 2016年)
高橋文治 「『元典章』の実際について」(招待)(国際学会)
(「羽田祈念館講演会」京都大学羽田祈念館 2016年)
谷口高志 「記の文学における自然と人為 中唐期から北宋中期にかけて」
(「日本宋代文学学会」東洋大学 2015年)

〔図書〕(計3件)

谷口高志、他2名「貶謫文化と貶謫文学 中唐元和期の五大詩人の貶謫とその創作を中心に」(査読無し)(勉誠出版 2017年 全648頁 pp.235-446)
高橋文治 谷口高志、他4名「元典章が語ること 元代法令集の諸相」(査読無し)
(大阪大学出版会 2017年 全385頁 pp.3-70 pp.173-266)
高橋文治、谷口高志、他1名「皇帝のいる文学史」(査読無し)
(大阪大学出版会 2015年 全376頁 pp.213-328 pp.329-369)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：加藤聡

ローマ字氏名：Kato Satoshi

所属研究機関名：京都女子大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：10335325

(2)分担者

研究分担者氏名：谷口高志

ローマ字氏名：Taniguchi Takashi

所属研究機関名：佐賀大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：10613317

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。